

幼児のひらがなの習得³

——国立国語研究所の1967年の調査との比較を通して——

島村直己¹ 三神廣子²

ACQUISITION OF HIRAGANA LETTERS BY PRE-SCHOOL CHILDREN
——In Comparison with the 1967 Investigation of the National Language Research Institute——

Naomi SHIMAMURA AND Hiroko MIKAMI

Since the National Language Research Institute's (NLRI) investigation "Hiragana letters read and written by pre-school children," in 1967, investigations of pre-school children's reading and writing ability conducted among regions have been nearly non-existent. Accordingly, the authors investigated the actual ability of 1,202 pre-school children in Tokyo and Aichi Prefecture to read and write Hiragana letters. Results show that children's reading and writing ability has improved since the 1967 NLRI investigation. However, according to the Ministry of Education, only 10% of the kindergartens teach reading and writing. So we conclude that there has been intentional early education in institutions outside nursery schools, kindergartens and the home.

Key words : hiragana letters, reading, writing, pre-school children, longitudinal comparison.

目 的

国立国語研究所が、ひらがなの読み書きに関して、1967年に東京、近畿、東北の3地域の幼児2,217名を対象に行った調査の結果(国立国語研究所, 1972)は、きわめて衝撃的なものであった。すなわち、同研究所が、1953年に小学校に入学したばかりの児童を対象に行った調査の結果(国立国語研究所, 1954)と比較すると、15年弱の間に、読みで1年半、書きで半年ほど発達が速まったという結果が得られたのである。そして、この調査の

後行われた同種の調査の結果は、この傾向が更に進んでいることを示している(愛知県教育センター, 1979; 上越教育大学, 1985; 神戸市立教育研究所, 1973; 長崎県教育センター, 1983 a・1983 b; 相模原市教育研究所, 1985; 文部省, 1986)。しかし、国立国語研究所の1967年の調査(以下「国語研調査」と略す。)以後、1市町村1都道府県の範囲を超えて行われた調査は、まったくと言ってよいほどなかった⁴。そこで、筆者らは、今回、東京都と愛知県の幼児1,202名を対象に、ひらがなの読み書きに関する実態調査を行った。調査の設計にあたって、次の4つのことに留意した。

- ・国語研調査の結果と比較できるように、同一の方法で調査すること。
- ・1市町村1都道府県を超えた広い範囲を調査地域とすること。

¹ 国立国語研究所 (The National Language Research Institute)

² 一宮女子短期大学 (Ichinomiya Women's Junior College)

³ 本研究は、幼児の文字と数のカリキュラム開発のために、日本児童教育振興財団の委託を受けて行ったプロジェクト研究(代表・萩原元昭)の一部である。筆者らは、ひらがなの読み書きを担当した。

⁴ 上越教育大学(1985)が唯一とも言える例外である。ただし、この調査は、対象幼児数があまり多くない。

- ・国語研調査は、幼稚園児だけを対象としているが、幼稚園児だけでなく保育所児も対象とすること。
- ・国語研調査は、4歳児クラスと5歳児クラスの幼児だけを対象としているが、それよりも下の年齢の幼児も対象とすること⁵。

本稿は、この調査の報告とともに、国語研調査以後20年ほど経過した経年変化を見ることを目的とするものである。

方法

1. 対象

東京都および愛知県の保育所13園、幼稚園19園⁶、計32園の3歳児クラス、4歳児クラス、5歳児クラスの幼児1,202名。平均月齢は、3歳児クラス50.3、4歳児クラス62.0、5歳児クラス74.0である。東京都ならびに愛知県の保育所および幼稚園の名簿を抽出台帳とした系統二段無作為抽出法によって無作為に抽出した園を調査園としたが、一部個別に依頼した園もあった。以下、年齢クラスを年齢と略し、3歳児クラス、4歳児クラス、5歳児クラスをそれぞれ3歳児、4歳児、5歳児と略す。対象幼児の年齢、性、幼保、地域別の構成をTABLE 1に示す。

TABLE 1 調査対象幼児の構成 (人)

		3歳児			4歳児			5歳児			合計
		男子	女子	小計	男子	女子	小計	男子	女子	小計	
保育所	東京都	33	39	72	17	21	38	20	18	38	148
	愛知県	24	21	45	41	40	81	58	35	93	219
	小計	57	60	117	58	61	119	78	53	131	367
幼稚園	東京都	60	78	138	128	125	253	87	100	187	578
	愛知県	31	38	69	40	20	60	70	58	128	257
	小計	91	116	207	168	145	313	157	158	315	835
合計		148	176	324	226	206	432	235	211	446	1202

2. 内容

国語研調査と同じである。すなわち、読みについては、

- ①清音・撥音 (「ん」) 46文字
- ②濁音 20文字
- ③半濁音 5文字

⁵ 面接調査は3歳児以上を対象に行ったが、それよりも下の年齢の幼児には、母親を対象に、質問紙によって幼児のひらがなの読み書きの程度について調査した。集計結果は、幼児の基礎学力研究会(1990)に報告した。

⁶ 東京都の幼稚園とした中に、1園だけ埼玉県与野市の幼稚園を含む。

- ④拗音 (例 おもちゃ) 6問
- ⑤促音 (例 きって) 3問
- ⑥長音 (例 ひこうき) 8問
- ⑦拗長音 (やきゅう) 6問
- ⑧助詞「は」 2問
- ⑨助詞「へ」 2問

を調査した。ただし、④～⑨については、①の清音・撥音46文字のうち40文字以上正しく読めた幼児だけを調査した。つまり、①の清音・撥音のうち40文字以上正しく読めなかった幼児は、④～⑨の特殊音節を1つも正しく読めないとみなしたわけである。そして、書きについては、

- ①清音・撥音 (「ん」) 46文字
- ②濁音 20文字
- ③半濁音 5文字

の71文字を調査した。ただし、正しく読めない文字は書けないとみなして、正しく読めた文字についてののみ調査を行った。

3. 方法

国語研調査で使ったのと同じ調査文字カードを利用して行った。すなわち、読みについては、文字(清音・撥音、濁音、半濁音の場合)ないし語(拗音、促音、長音、拗長音、助詞「は」、助詞「へ」の場合)で提出して読ませるものであり、そして書きについては、絵を示しながら、「××の○」と言って、絵の名前(××)の最初の音節(○)を書かせるものである。

読み書きとも同一時間に行い、読みの調査終了後、すぐに書きの調査を行った。調査には、筆者らのほか、心理学、教育学、社会学、家政学等の専攻の学生(学部学生、大学院生)があたり、幼児の就園している保育所、幼稚園で個別テストの形式で実施した。

4. 集計

幼児の解答は、調査員がその場で正誤判定を行い、記録用紙に判定結果等を記入した⁷。それをコード化し、機械可読形式にして、コンピュータによって集計した。

コードの体系は、誤答傾向を分析することを主目的に作った。ただし、読みでは、幼児音や方言音で読んだものと、「は」「へ」を「ワ」「エ」と読んだものを正答としたが、他の正答とは別のコードを付けた。また、書きでは、字形と筆順の両方とも正しいものと、字形だけ正しいものを区別してコードを付けた。

5. 時期

⁷ 書きの場合は、調査終了後、担当者(三神)が更に幼児の解答をチェックした。

1988年11月下旬～12月中旬

結 果

1. 読み

1.1. 平均読字数

平均読字数は、清音と撥音の「46文字の範囲」では、

3歳児——14.0字 (30.4%)

4歳児——34.7字 (75.4%)

5歳児——43.8字 (95.2%)

であった。それに濁音と半濁音を加えた「71文字の範囲」では、

3歳児——18.6字 (26.2%)

4歳児——49.7字 (70.0%)

5歳児——65.9字 (92.8%)

であった。46文字の範囲よりも、71文字の範囲のほうが平均読字数の割合が小さい。すなわち、清音・撥音のほうが濁音、半濁音よりも習得が早い。なお、読字率の月齢発達の経過を、TABLE 2 に示した。4歳台の初めて4分の1、後半で半分、そして5歳台の初めて4分の3、後半で9割の文字が読めるようになると、だいたい言えるだろう。

TABLE 2 読字率の月齢発達

	46文字の範囲	71文字の範囲
25%を超える月齢	4歳1か月	4歳4か月
50%を超える月齢	4歳8か月	4歳8か月
75%を超える月齢	5歳1か月	5歳3か月
90%を超える月齢	5歳10か月	5歳10か月

1.2. 読字数の分布

TABLE 3は、71文字の範囲での読字数の分布を示し

TABLE 3 読字数の分布 (%)

読字数	3歳児	4歳児	5歳児
0-4	53.9	9.3	0.7
5-9	8.0	6.3	1.1
10-14	5.2	3.5	0.4
15-19	3.1	3.7	0.9
20-24	3.4	2.8	0.7
25-29	0.9	1.4	0.4
30-34	0.9	1.9	0.2
35-39	1.2	1.4	0.4
40-44	1.5	1.6	0.9
45-49	1.2	3.0	1.3
50-54	2.5	3.2	1.1
55-59	2.2	2.8	2.5
60-64	1.5	9.5	4.9
65-69	5.2	13.9	17.9
70-71	9.3	35.7	66.6

たものである。3歳児では、「0-4」の区間に半分以上の幼児が集中しているが、4歳児、5歳児では、65文字以上の区間に集中するようになる。特に5歳児では、7割近くの幼児が「70-71」の区間に集中している。しかし、全体をまとめて見ると、FIGURE 1 に示すように、「10-14」と「55-59」を変曲点とするU字型分布をしている。

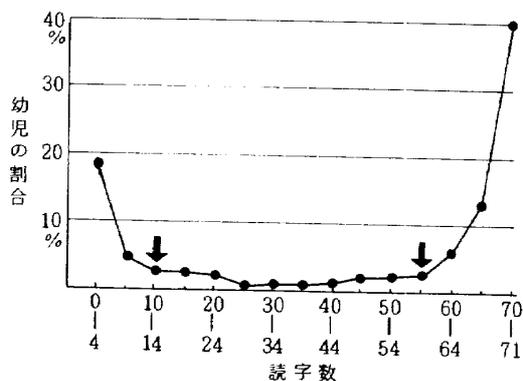


FIGURE 1 71文字の範囲での読字数の分布 (全体)

1.3. 文字種別読字率

清音・撥音、濁音、半濁音、拗音、促音、長音、拗長音、助詞「は」、助詞「へ」の文字種別の読字率を求めると、TABLE 4 のようになる。清音・撥音、濁音、半濁音は、平均読字数の割合である。そして、拗音、促音、長音、拗長音、助詞「は」、助詞「へ」は、平均正答数の割合である。清音・撥音のほうが濁音、半濁音よりも習得が早い。そして、1文字1音節対応の清音・撥音、濁音、半濁音のほうが、そうでない拗音、促音、長音、拗長音や、助詞「は」、助詞「へ」よりも習得が早い。

TABLE 4 文字種別読字率 (%)

文字種	3歳児	4歳児	5歳児
清音・撥音	30.4	75.4	95.2
濁音	19.3	63.0	90.3
半濁音	14.7	49.3	81.7
拗音	6.4	30.5	65.7
促音	8.7	36.2	72.9
長音	7.3	25.8	55.4
拗長音	6.6	28.2	60.1
助詞「は」	9.1	33.8	65.6
助詞「へ」	7.9	30.8	65.5

1.4. 地域、幼保、性による違い

地域、幼保、性による違いはどの程度あるだろうか。東京都と愛知県を調査地域としたのは、主として、調

査の便宜のためであったが、この2つの地域を比較することによって、幼児のひらがなの習得の地域差について、ある程度の見通しを付けることができると思われる。清音・撥音、濁音、半濁音の71文字について、年齢、地域、幼保、性の組合せで平均読字数を計算すると、TABLE 5 のようになった。東京都 (40.9) よりも愛知県 (45.4) のほうがよく、保育所 (39.8) よりも幼稚園 (46.5) のほうがよかった。そして男子 (40.4) よりも女子 (45.9) のほうがよかった⁸。TABLE 5 の平均読字数によって分散分析を行うと、主効果に関しては、いずれも有意であった。分散分析表を TABLE 6 に示す。交互作用に関しては、A×B (年齢×地域) と B×C (地域×幼保) のみ有意であった。FIGURE 2, FIGURE 3 を参照のこと。

TABLE 5 年齢・地域・幼保・性別平均読字数

	東京都		愛知県		東京都		愛知県	
	保育所		幼稚園		保育所		幼稚園	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
3歳児	8.8	14.5	19.3	27.5	12.4	10.1	15.9	22.9
4歳児	28.7	37.5	47.2	53.7	52.5	57.5	43.5	62.7
5歳児	59.0	62.6	64.4	67.5	68.6	65.5	64.3	68.7

TABLE 6 読みの分散分析表

要因	SS	df	MS	F
A (年齢)	9740.90	2	4870.45	1393.38**
B (地域)	121.05	1	121.05	34.63*
C (幼保)	266.00	1	266.00	76.10*
D (性)	182.05	1	182.05	52.08*
A×B	213.10	2	106.55	30.48*
A×C	61.94	2	30.97	8.86
A×D	64.23	2	32.11	9.19
B×C	135.85	1	135.85	38.87*
B×D	1.35	1	1.35	0.39
C×D	39.27	1	39.27	11.23
B×C×D	40.82	1	40.82	11.68
A×C×D	1.96	2	0.98	0.28
A×B×D	22.77	2	11.39	3.26
A×B×C	72.16	2	36.08	10.32
誤差	6.99	2	3.50	
全体	10970.44	23		*P<0.05 **P<0.01

⁸ カッコ内の数字は、TABLE 5 にもとづいた各水準の平均値である。2.4. の書きの場合も同様である。

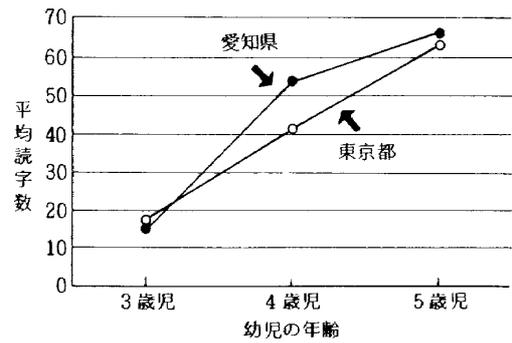


FIGURE 2 「年齢」の要因と「地域」の要因との関係

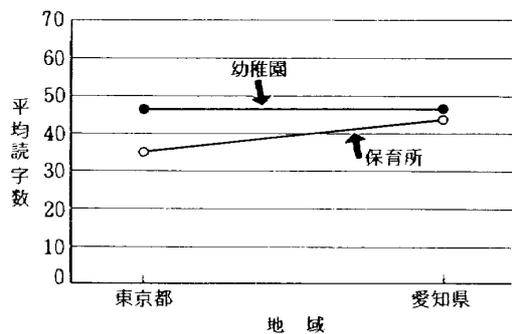


FIGURE 3 「地域」の要因と「幼保」の要因との関係

2. 書き

2.1. 年齢別平均書字数

平均書字数は、46文字の範囲では、

3歳児——3.7字 (8.0%)

4歳児——15.9字 (34.6%)

5歳児——31.6字 (68.7%)

であった。そして、71文字の範囲では、

3歳児——4.5字 (6.3%)

4歳児——20.9字 (29.4%)

5歳児——44.6字 (62.8%)

であった。清音と撥音の46文字の範囲よりも、それに濁音と半濁音を加えた71文字の範囲のほうが平均書字数の割合が小さい。すなわち、読みと同様に、清音・撥音のほうが、濁音、半濁音よりも習得が早い。以上は、字形が正しく筆順も正しい解答だけを正答とした結果である。筆順の正誤に関係なく字形が正しい解答を正答として計算すると、46文字の範囲では、

3歳児——4.7字 (10.2%)

4歳児——19.5字 (42.4%)

5歳児——35.8字 (77.8%)

であり、71文字の範囲では

3歳児——5.8字 (8.2%)

4歳児——25.8字 (36.3%)

5歳児——50.9字 (71.7%)

であって、上と同じ傾向が見られた。以下、国立国語研究所 (1972) に従って、字形が正しく筆順も正しい解答だけを正答とする。そうすると、書字率の月齢発達の経過は、TABLE 7 のようになる。4歳台の後半で4分の1、5歳台の後半で半分、そして6歳台の後半で4分の3の文字が書けるようになると、だいたい言えるだろう。

TABLE 7 書字率の月齢発達

	46文字の範囲	71文字の範囲
25%を超える月齢	4歳10か月	5歳2か月
50%を超える月齢	5歳9か月	5歳9か月
75%を超える月齢	6歳7か月	—
90%を超える月齢	—	—

2.2. 書字数の分布

TABLE 8 は、71文字の範囲での書字数の分布を示したものである。3歳児では、「0-4」の区間に4分の3以上の幼児が集中している。4歳児では、「0-4」の区間にやはりいちばん多く幼児が集中しているが、その割合は全体の4分の1ほどになる。5歳児では、50文字以上の区間に、だいたい半分の幼児が集中するようになる。そして、全体をまとめて見ると、FIGURE 4 に示すように、読みと異なり、書けない幼児が多く書ける幼児が少ない逆J字型の分布をしている。

TABLE 8 書字数の分布 (%)

書字数	3歳児	4歳児	5歳児
0-4	76.7	27.2	3.4
5-9	8.3	10.2	3.8
10-14	4.6	9.3	2.0
15-19	3.4	7.4	3.1
20-24	1.5	6.5	2.7
25-29	1.9	7.6	5.6
30-34	0.6	6.3	6.1
35-39	0.6	5.3	8.5
40-44	0.3	5.1	7.0
45-49	0.6	5.6	8.7
50-54	0.0	3.7	11.2
55-59	0.9	3.2	12.6
60-64	0.6	1.9	14.6
65-69	0.0	0.7	9.4
70-71	0.0	0.0	1.3

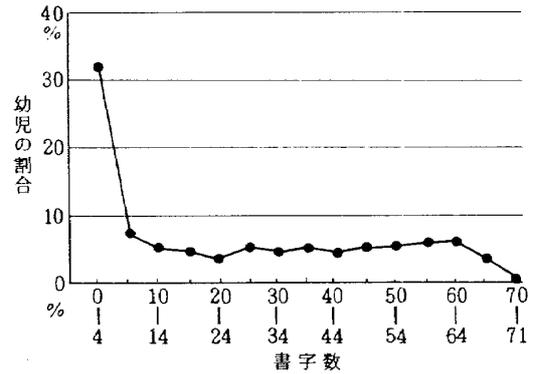


FIGURE 4 71文字の範囲での書字数の分布 (全体)

2.3. 文字種別書字率

清音・撥音、濁音、半濁音の文字種別の書字率を求めると、TABLE 9 のようになった。いずれも書けた平均文字数の割合である。読みと同じように、清音・撥音のほうが濁音、半濁音よりも習得が早い。文字種に限って言えば、読み書き同じような習得傾向を示していると言えるだろう。

TABLE 9 文字種別書字率 (%)

文字種	3歳児	4歳児	5歳児
清音・撥音	8.3	34.6	68.7
濁音	3.7	21.3	54.4
半濁音	1.9	14.1	43.8

2.4. 地域、幼保、性による違い

地域、幼保、性による違いはどの程度あるだろうか。71文字の範囲について、年齢、地域、幼保、性の組合わせで平均書字数を計算すると、TABLE 10 のようになった。読みと同じく、東京都(20.5)よりも愛知県(24.3)のほうがよく、保育所(20.2)よりも幼稚園(24.5)のほうがよかった。そして、男子(18.7)よりも女子(26.1)のほうがよかった。しかし、TABLE 10 の平均書字数によって分散分析を行うと、主効果に関しては、年齢、幼保、性のみ有意であった。分散分析表を TABLE 11 に示す。交互作用に関しては、有意なものはない。

TABLE 10 年齢・地域・幼保・性別平均書字数

	東京都				愛知県			
	保育所		幼稚園		保育所		幼稚園	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
3歳児	1.0	4.2	6.0	6.8	1.1	1.6	3.2	5.8
4歳児	8.4	15.3	16.6	26.7	17.4	28.1	17.8	27.2
5歳児	29.6	44.2	38.3	48.6	41.5	49.9	43.1	54.3

TABLE 11 書きの分散分析表

要因	SS	df	MS	F
A (年齢)	6477.87	2	3238.94	699.30**
B (地域)	85.50	1	85.50	18.46
C (幼保)	113.10	1	113.10	24.42*
D (性)	327.82	1	327.82	70.78*
A×B	87.19	2	43.60	9.41
A×C	2.25	2	1.13	0.24
A×D	98.06	2	49.03	10.59
B×C	33.84	1	33.84	7.31
B×D	0.40	1	0.40	0.09
C×D	0.00	1	0.00	0.00
B×C×D	2.10	1	2.10	0.45
A×C×D	0.74	2	0.37	0.08
A×B×D	4.41	2	2.21	0.48
A×B×C	23.17	2	11.59	2.50
誤差	9.26	2	4.63	
全体	7265.71	23	*P<0.05	**P<0.01

考 察

TABLE 12 は、国語研調査の結果と今回の調査の結果とを比較したものである。カッコ内の数字は、幼稚園児の結果である。今回の調査の4歳児の成績は、国語研調査の5歳児の成績に近かった。国語研調査の5歳児の成績と比較すると、読みで94%、書きで80%の成績であった。幼稚園児だけを比べると、読みで95%、書きで98.9%の成績であった。

1967年の国語研調査の結果は、その15年ほど前に行われた調査の結果と比べると、読みの成績のきわめて向上していることが特徴であった。そして、この理由として、強制的な教え込みではなく、文字環境の整備があげられていた。今回の調査は、国語研調査の結果と比べると、読み書きともほぼ同じ程度成績が向上している。問題は、このことの解釈である。筆者らは、20年ほど前の国語研調査のときと異なり、意図的な教育(強制的な教え込み)が介在しているためではないかと考える。一般に、読みは日々の経験から自然に習得することが可能であるのに対し、書きは自覚的に行わなければならない習得できないものである。漢字習得の研究の結果(天野清・黒須俊夫, 1992; 国立国語研究所, 1988)から、このことが言える。特に、筆順まで正しく習得しているのは、このことを裏付けていると考える。ちなみに、調査幼児の母親を対象にして、この調査と同時にやったアンケート調査の結果によると、「子どもが字を書くときは、いつも筆順に注意を払っている。」と

答えた母親の割合は、幼児の年齢が上になるほど大きくなり、5歳児の母親の場合、45%となった⁹。幼児のひらがなの習得に対する親の教育関心の増大を示していると言えるだろう。

しかし、文部省(1986)によると、文字の一斉指導を行っている幼稚園の数は、1割ほどにし過ぎない。したがって、保育所、幼稚園、そしておそらくは家庭以外の場での教育(機関)が介在していることが想像される。

また、読みの場合、地域と幼保との間に交互作用が認められたが、実は、書きでも、有意ではないが、同様の傾向が見られるのである。このことも含めて、幼児のひらがなの習得について、さらに調査する必要があるだろう。

TABLE 12 読み書きの経年比較

		国語研調査	今回の調査	
調査時期		1967年 11月	1988年 11~12月	
調査対象		幼稚園児	保育所児 幼稚園児	
読 み	46 文字	5歳児	○36.8	43.8(43.9)
		4歳児	24.4	○34.7(35.1)
		3歳児	—	14.0(16.7)
	71 文字	5歳児	○53.0	65.9(66.1)
		4歳児	33.5	○49.7(50.3)
		3歳児	—	18.6(22.5)
書 き	46 文字	5歳児	◎19.9	31.6(35.8)
		4歳児	8.7	◎15.9(19.5)
		3歳児	—	3.7(4.7)
	71 文字	5歳児	◎26.0	44.6(50.9)
		4歳児	10.8	◎20.9(25.8)
		3歳児	—	4.5(5.8)

[注] カッコ内は幼稚園児の結果。

引用文献

- 愛知県教育センター 1979 幼稚園・小学校の教育の連携に関する研究 ―幼児の実態をふまえた文字指導のあり方について― 研究紀要, 65集
天野清・黒須俊夫 1992 小学生の国語・算数の学力 秋山書店

⁹ 幼児の基礎学力研究会(1990 170頁)に報告した。「筆順について、家庭ではどのようなあつかいをしていますか。」という質問に対する結果(三肢択一)である。

- 上越教育大学 1985 文字の読み書き実態調査報告書
上越教育大学国語科教育研究室
- 国立国語研究所 1954 入門期の読み書き能力 秀英
出版
- 国立国語研究所 1972 幼児の読み書き能力 東京書
籍
- 国立国語研究所 1988 児童・生徒の常用漢字の習得
東京書籍
- 神戸市立教育研究所 1973 幼・小教育の連けいに関
する研究III 研究紀要, 130号
- 文部省 1986 幼稚園教育の在り方について 文部省
- 長崎県教育センター 1983 a 幼児の言語能力に関す
る調査研究(そのII) 紀要, 121号
- 長崎県教育センター 1983 b 幼児の言語能力に関す
る調査研究(そのIII) 紀要, 127号
- 相模原市教育研究所 1985 望ましい幼・小の関連性
—文字・数の実態とその課題— 研究集録, 84集
- 幼児の基礎学力研究会 1990 幼児の文字と数に関す
る母親を対象にしたアンケート調査 日本児童教
育振興財団委託研究報告書
(1993.7.5受稿, 11.17受理)